

市橋文庫蔵『弥生日記』訳注(二)

愛知県立大学稀書の会

本学学術情報センター市橋文庫には、岡崎の俳人鶴田卓池と刈谷の俳人中島秋拳が編纂した『弥生日記』の刊本を蔵する。稀書の会では、地域の文化及び文化交流史の考究・紹介を目的として、本学が豊富に蔵する古俳書資料のうちから、この『弥生日記』を選び、その読解に取り組んでいる。月に一度の輪講により昨年度から読み進め、今年度の年報原稿は、輪講の成果の中から、冒頭の卓池・秋拳の五十韻のうち第十九句から第四十句までをとりあげた。

輪講での各句の検討は、稀書の会のメンバーが担当し、参加者による複数回の討議を経た後にあらためて年報用に成稿している。輪講の際の発表者の名を担当箇所末尾に記し、原稿の末尾には、稀書の会の会員の名を記した。

【凡例】

- 一、底本は文政七年五月名古屋久兵衛版『弥生日記』愛知県立大学学術情報センター市橋文庫蔵（CH・142）本である。
- 一、翻字本文は、文政七年版を忠実に翻刻した。本文掲出にあたっては、【翻刻】に本稿で扱う箇所を一括掲出し、【注釈】部分には、注釈の便を考慮して適宜分割・本文改訂をなした形でとりあげた。

- 一、注釈本文は、読解の便をはかるため、底本を歴史的仮名遣い表記に改め、必要に応じて濁点を付し、句読点を補つ

た。翻字本文を適宜参照されたい。原文の表記の誤りかと考えられる箇所は改め、あて字、異体字、送り仮名は標準的な表記に直して示した。漢字表記が自然である語句に関しては、全体の統一を考えて漢字に直し、難読語句には、校注者が（ ）書きで振り仮名を付し、踊り字はすべて開いた。

一、注釈本文の各句には、便宜上、校注者による通し番号を付し、前句を添えた。

一、訳注においては、【語釈】、【一句立】、【現代語訳】の項目を設け、必要な場合には【考察】の項目も設けた。

一、【語釈】にあげた和歌、連歌、俳諧などの引用は、後述引用文献に依る。読解に有効と考えられる場合には、先例のみならず後代の作品も例示する場合がある。引用にあたっては私に濁点を付し、片仮名など読解に不便な文字は必要に応じ平仮名に改めた。

【翻刻】

鹿の生血これも御悩のためなれは 拳

うなつきあふてかへす良等 池

梅の饗モウケいつれ五更や過ぬらむ 拳

河岸は柳につく出格子 池

よそめからみれはなさけも薄かすみ、

蒲萄峠に縁さりの雨 拳 「(三ウ)

あとかくす声は乙キントのおくり人 池

この一輪の牡丹剪しに 拳

日たけても蚊帳はつれぬ西の館 池

摩利支天へはいかなねきこと 拳

高麗へすくに渡れと鶴を放ちけり

池

たふりくくと波のしからむ

拳

芽にたつて冬の柁マサキのむらみとり

池

飾り鞆をへたつ齒サキしり

拳

野かけより愛もおとろふ主馬之助

「(四才)

踊りくつしにありく七夕

拳

女貞ネツモテ木に月のかくる、町はつれ

池

たしなき米をはかる朝貞

拳

厭離エンリ穢土エトゴソク欣求は越の山こもり

、

卷てたのしき敗軍の蓑

池

こからしにあふらか、りし鳶サヨリ細魚

拳

積はへてある薪の入札

池

【注釈】

風ひやひやとはまつづら吹く

初裏十一(十九)鹿の生血(のり)これも御惱のためなれば

秋拳

【式目】 秋(鹿)

【作者】 秋舉

【語釈】 ●鹿の生血(のり)

鹿の生血は『播磨国風土記』と『妹背山婦女庭訓』にその用例が見られるが、どちらとも呪術的な物として描かれている。「妹玉津日女の命、生ける鹿を捕らへ臥せて、その腹を割きて、稲をその血に種きたまひき。」(『播

磨国風土記」〔讚容の郡〕。「彼の村に在せる太水の神、辞びて云りたまひしく、「吾は宍の血以て佃る。故れ、河の水を欲りせず」とのりたまひき。」〔播磨国風土記〕「賀毛の郡」。「白き牝鹿の生血を取り、母に与へしその験。健やかなる男子出生。鹿の生血胎内に入るを以て入鹿と名付く。さるによつて。きやつが心をとらかすには。爪黒の鹿の血汐と。疑着の相のある女の生血。これを混じてこの笛に灌ぎかけて調ぶる時は。実に秋鹿の妻恋ふ。如く。自然と鹿の性質顕れ。色音を感じて正体なし。」〔妹背山婦女庭訓・御殿の場〕。この句は前句の「つづら」という語から『妹背山婦女庭訓』の二段目にてでくる「つづら山の段」を連想したものと思われる。『妹背山婦女庭訓』では蘇我入鹿（～六四五年）を倒すためには鹿の生血が必要とされており、入鹿に帝位を脅かされた天智天皇（在位六六八～六七二）を助けるために芝六という男（獵師に身をやつしている家臣）がつづら山で鹿狩りをする場面が描かれている。つづら山の鹿を狩った者は死罪になるという法度があり、「のり」という音は「生血」を指すと同時に、その生血を手に入れるために犯した、鹿を狩ってはならないという「鹿の法」をもかけているものと思われる。「消えて散つたる血刀の。のりの誓ひもあさましや。」（薩摩歌）。新編日本古典文学全集本の注では、この一文を「生血（鮮血）」に「法」を言いかける。」と解説している。●御悩 天子などの高貴な人の病氣。この句では入鹿に帝位を脅かされた天智天皇の窮地のことを指しているものと思われる。「御悩の刻限に及んで、東三条の森の方より黒雲一むら立ち来て」（平家物語・鶴）。「主上の御悩、世中騒がしき時は、五条の天神に鞍を懸けらる」（徒然草第二百二段）。「楊貴妃の花の御悩はあらし哉」（犬子集・春下・重頼・404）。

【一句立】鹿の生血（を手に入れる事）、これも御病氣（平癒）のためならば（やってみせよう）。

【現代語訳】（前句）風がひんやりと浜つづらに吹いている。そのつづらではないけれど「つづら山の段」の芝六は、狩れば死罪という「鹿の法」を犯して鹿の生血を手に入れることも、帝の窮地を救うためならばと、命をかけて事にあつたのだ。

【考察】「つづら山」は現在の若草山の旧名とされる。「つづら山」は、『興福寺流記』に、「黒葛中尾」、『多聞院日記』

永祿十年（一五六七）五月十八日の条に、「ツ、ラ尾山」とあり、若草山（三四一・八メートル）の旧名と言う。」（『和歌の歌枕・地名大辞典』）。若草山は奈良公園に含まれており、和歌においては春日野と合わせて詠まれ、俳諧には「つづら山」が見られる。「今も猶つまやこもれる春日の若草山にうぐひすの鳴く」（瓊玉和歌集・春歌上・たてまつらせたまひし百首に鶯・15）。「今日は又春雨ふりぬ春日野や若草山の同じみどりに」（通勝集・着到百首和歌天正十四・野春雨十七日・111）。「神々と春日茂りてつづら山」（仏兄七久留万・夏・奈良にて・250）。奈良公園の鹿は春日大社の神の使いとされており、古くから禁獵とされていた。『妹背山婦女庭訓』ではこの禁を破った芝六の罪が露見し、その罪を息子の三作が被つて大垣の刑に処されそうになるという場面が描かれている。

（美濃羽）

鹿の生血（のし）これも御悩のためなれば

初裏十二（二十）うなづきあふてかへす郎等

卓池

【式目】 雑

【作者】 卓池

【語釈】 ●うなづきあふ お互いに了解・承諾の意を共有しあう。「いざさらばしまつくらん見るとちは頷きあひて心ゆくめり」（挙白集・巻第五俳諧部・175）。「かいま見にうなづきあふやゆりの花」（梨園・鳥部・東写・742）。●郎等 武家の家来。家臣。底本では「良等」であるが、注釈本文では「郎等」と訂正した。「非人小屋へと急ぐ郎等」（二葉集・1791・高滝益翁）。「身は良等（郎等）の他なく召るる」（浮葉巻葉（二十四句）安永四年・6・素堂）。「郎等…軍馬 鶴を射 馬まはり 実盛 忠盛」（俳諧類船集）。

【一句立】 頷きあつて返事をする郎等。

【現代語訳】（前句）鹿の生血のために鹿の法を犯し、死の危険を冒すことも帝の御病気を治すためであればやってみ

せよう、と）頼政は領いて合図を送り、頷き合うことで郎等の井の早太も返事をかえした。

【考察】語釈にあげたように郎等の付合には「鶴を射る」という語があるが、鶴の付合は「鶴：三条の森の梢 御悩
黒雲 頼政 諷 うつほ舟 あしの屋 天河原」（俳諧類船集）となっており、「郎等」と「鶴を射る」、「鶴」と「御悩」の付合はどちらも『平家物語』巻四「鶴」に関わっている。『平家物語』が広く知られた物語であったことから「御悩」と「郎等」が寄合として考えられており、前句の「御悩」からこの句の「郎等」が導き出されたものと思われる。

（美濃羽）

うなづきあふてかへす郎等

初折裏十三（二十一）梅の饗いづれ五更や過ぬらむ

秋拳

【式目】春（梅）

【作者】秋拳

【語釈】●饗 饗宴。酒盛り。●いづれ いずれにしても。郎等たちが、梅の宴は、明け方まで続くに違いないと類推していることとった。●五更 ①一夜を五つの更に分けた、その全体の称。一夜。ひと晩中。②第五の更。季節により時刻・時間に差異があるが、ほぼ寅の刻、午前四時およびその前後。ここでは、②の意味。

【一句立】梅の花を楽しむ饗宴は、どのみち五更を過ぎてしまっているであろうか。

【現代語訳】（前句 頷き合ってひきかえす郎等たち。）梅の花を愛でる饗宴は、盛会となつてどのみち五更を過ぎてしまふのだらうよ。

（狩野）

梅の饗いづれ五更や過ぬらむ

初折裏十四(二十二) 河岸は柳につづく出格子

卓池

【式目】春(柳)

【作者】卓池

【語釈】●河岸 川の岸。また、特に舟から人や荷物の上げ下ろしをするところ。転じて、海や湖の岸にもいう。●柳 柳の木。護岸、水害防止のために河岸に多く植えられた。「梢をも踏む河岸の柳かな」(大発句帳・1024)。ここは前句の「梅」から付合が繋がる。「梅トアラバ…柳…」(連珠合璧集)。●出格子 外のほうへ張り出して物の置ける台を作った格子。仕舞屋や妾宅などの構えに多かった。「出格子のうちなく計憂わかれ」(時勢粧・732)、「出格子の前海わたる舟」(談林十百韻・154)、「出格子で鯉買ふ日は旦那が来」(柳多留・二)等。

【一句立】河岸は、柳が生え、それに続いて出格子の家が連なりあつて建っているような様子である。

【現代語訳】(前句 梅の花を愛でる饗宴はどのみち五更を過ぎてしまっているだろうよ。)外を見れば、夜も明けた早朝の河岸は、柳が生え、それに続いて出格子の構えの家が連なりあっているような様子である。

(狩野)

河岸は柳につづく出格子

二折表一(二十三) よそめからみればなさけも薄がすみ

卓池

【式目】恋(なさけ)、春(薄がすみ)

【作者】卓池

【語釈】●よそめ 他人の見る目。はため。「野は春の朝風殿風吹にけり／余所目かまはず返すは田夫」(時勢粧・2610／2611)。
●なさけも薄がすみ 「なさけも薄(し)」と、「薄がすみ」を掛けてつなく表現。「朝日影にほへる山の薄霞それしも春のなさけとぞみる」(菊葉集・春歌上・45・題しらず・実富朝臣)。●薄がすみ 薄くかかっている霞。春の季語。「薄

がすみ心ふかしやさほ姫のにはほしそむる春の曙」(春夢草・202)。「春なれや名もなき山の薄霞」(野ざらし紀行・32)。
また、恋を詠む句の中で使用されることもある。「籠はらひ恋には科の薄がすみ」(大坂檀林桜千句・323)。

【一句立】愛し合う者たちは、自分たちの愛情は強くいつまでも続くものだと思っていようが、はためから見れば、愛情とは薄くかかる霞のようなはかない消えやすいものなのだ。

【現代語訳】(前句 河岸は、柳が生え、それに続いて出格子の家が連なりあつて建っているような様子である。)その光景を見るともなしに見ているのだが、愛情というものについても、他人がはためから見るところでは、薄くかかる霞のように脆く儂いものといえるのだ。

【考察】ここで折が改まる。前句に続き卓池が詠んでいるが、卓池は同一人が句を続けるといふこの状況を生かし、風景を詠んだ前句を人の感情を詠むこの句へと巧みに転換させている。

(狩野)

よそめからみればなさけも薄がすみ

二折表二(二十四) 蒲萄峠に縁切りの雨

秋拳

【式目】 雑

【作者】 秋拳

【語釈】 ●蒲萄峠

現在の新潟県村上市にある。『曾良旅日記』には、元禄二年六月二十八日、「中村ヲ立^{名ニ立程ノ無難所}至蒲萄。甚雨

降ル。追付、止」と記される。また、盤泉(無禪)の『湯殿紀行』には、元禄七年に通過した同所について、「蒲萄^{フタウ}

山、側ツテ交へ枝ヲ、谷邊シテ無ク日如ニシテ踐^{フムカ}蜀山ヲ、至テ嶮シク至テ危ク、昼出テ、蒲萄ノ里ニ歇フ」と記されて

いることが指摘されている(日本歴史地名大系15『新潟県の地名』)。
●縁切り 夫婦、親子、兄弟、主従などの関係を絶つこと。絶縁。「是はお梅が飲んだ盃、是を形見のえん切と、懐に入れければ」(心中万年草・中)。
●切り 「切り」

を「霧」と重ね、薄がすみ―霧―雨という連想があるか。少なくとも、前句に「霞」があり、この句に「雨」を入れることで、天候を表す語句どうして続けるつながりがある。●蒲萄―縁きり 蒲萄と無道（「ぶたう」―道理に合わない。人の道にそむく。）を掛け、そこから「縁切り」を導いたかもしれない。「むしり取人は悪逆蒲萄哉」（ゆめみ草・2218）

【一句立】蒲萄峠には、人の縁を断ち切るかのように雨が降っている。

【現代語訳】（よそめから見れば、愛情とは薄くかかる霞のような、はかなくすぐに消えてしまうものだ。）その薄い霞を今消すかのように、蒲萄峠に人の縁を断ち切る雨が降る。

【考察】いわゆる「縁切り寺」として、東慶寺（鎌倉）と満徳寺（群馬県太田市に遺跡あり）がある。また、群馬県多野郡上野村と、長野県南佐久郡北相木村の間には、「ぶどう峠」がある。上記二点を考え合わせれば、この句に「ぶどう峠」を越えて縁切り寺へ行く、という連想が働いている可能性は必ずしも否定できない。しかし、同じ上野国内ではあっても、ぶどう峠付近と満徳寺付近との間には相当な距離の隔たりがあるため、安易に結び付けることはできない。

ところで、縁切りと文芸との関係については、高木侃氏によって「江戸時代にあっても縁切寺は特異な制度であり、庶民にとつては離婚ということとあわせて興味をそそられたようで、川柳にも好んで詠まれた。ただし、川柳の対象となったのは東慶寺だけで、土地の呼び名にちなんで「松ヶ岡」として詠まれている」（『三くだり半と縁切寺』第四章縁切寺へ駆け込む女たち）と指摘されている。俳諧資料などの博搜によつては、或いは満徳寺に関しても、同様の例を発見できる可能性もある。また、高木氏は「妻が離婚を求めてかけこむ所は、縁切寺ばかりではなく、武家屋敷をはじめ、「夫の手に負えない場所」がいろいろあった。」と同書で述べる。次の句に出る地名乙には、乙寺がある（二十五句参照）。乙寺もまた、縁切寺以外の駆け込み寺的な機能を有していたのかもしれない。

（狩野）

二折表三(二十五) あとかくす声は乙のおくり人

卓池

【式目】 雑

【作者】 卓池

【語釈】 ●あとかくす その存在を隠す。居場所がわからない。「御狩野に猶かきくれて降る雪やつかれの鳥の跡隠すらん」(延文百首・鷹狩・908・二条為重)。「跡かくす師の行方や暮の秋」(蕪村集発句編・1469) ●乙(きのと) 東南東の方角。一句ではこの意味で使われているか。また、越後国の地名。現在の新潟県胎内市(旧新潟県蒲原郡中条町)。蒲萄峠からほど近く、前句とは、地名のつながりで句を付けていよう。『日本歴史地名大系』によれば、江戸時代の乙村は、東を乙大日川(旧胎内川)が北流し、北は地藏堂村、東は松木新村に接する砂丘上の村で、古刹乙宝寺を中心とする村である。乙宝寺は、新義真言宗智山派、号如意山。天平八年(七三六)に婆羅門・行基により開かれたという寺で、室町時代前期には乙寺とも称されていた(『乙寺縁起』)。「三越路や乙の寺の花ざかり」(『秋の夜評語』) 乙寺は御教へにまかせ、貴境下向の節、予も立寄拜み候。」この句によつて、乙宝寺が江戸時代においても乙寺と呼ばれたこともわかる。また、『秋の夜評語』は潜淵庵不玉の歌仙に芭蕉が付けた評語であり、芭蕉は乙寺にたちよつた経験を述べている。なお、『曾良旅日記』にも、元禄二年(一六八九)七月一日、芭蕉は奥の細道の帰途村上から乙村に至り、乙宝寺へ参詣したとあつた(↓二十四句参照)。こうしたこと、卓池が蒲萄峠から乙へと句をつなぐ手法につながつたのではなからうか。 ●おくり人 見送りの人。「雪ともに傘返しけり送り人」(挙白集・85)。

【一句立】 居場所はわからないが聞える声は、乙(東南東)の方角から聞えてくる、それは見送りの人の声なのだ。

【現代語訳】 (前句 蒲萄峠には、人の縁を断ち切るかのように雨が降っている。) 雨音をかき消して聞こえてくる声は、乙村からの見送りの人のものである。

あとかくす声は乙のおくり人

二折表四（二十六）この一輪の牡丹剪しに

秋挙

【式目】牡丹（夏）

【作者】秋挙

【語釈】●牡丹 牡丹は一座一句物、初夏（俳諧初学抄）。中国産で、古く日本に渡来し、薬効だけでなく観賞用として庭に植えられていた植物である。例えば、十七世紀の名古屋城二の丸庭園の様子をえがいた「中御座之間北御庭惣絵」には、観賞用と思われる牡丹を植えた花壇が三列ずつ並ぶ様子が見られた（『名古屋城の庭園』（1908・名古屋城振興協会）に絵図を掲載しており、また飛田範夫氏『日本庭園の植栽史』（京大文学部リポジトリより）に、この点の指摘がある）。このように、江戸初期から牡丹の鑑賞は広く行なわれており、それゆえ、俳諧には牡丹の句は極めて多い。「一輪に花の波ある牡丹かな」（平安二十歌仙・824・阿空）。「どやどやと牡丹つりこむ堀の内」（枇杷園句集・120）。また、越後国で江戸時代から盛んに牡丹を栽培していたことは、後述のように『越後名寄』などからわかる。「菰はりや越後そだちの冬牡丹」（笈日記・1010・治棟）。●剪しに 牡丹を切った時に。牡丹は切ってしまうとすぐにしおれてしまう、持ちのよくない花である。

【一句立】この一輪の牡丹を切ったところ。

【現代語訳】（居場所はわからないが聞える声は、乙（東南東）の方角から聞えてくる、それは見送りの人の声なのだ。）この一輪の牡丹を切ったその時に、声が聞えてきた。

【考察】

見送りの饞別には古くより柳の枝を折る。中国漢の時代に、長安の人が客を送って覇橋に至り、柳の枝を折って別れた風習にはじまるというものである。ここは、越後国では牡丹の栽培がなされていると秋挙が知っており、それゆえに乙村の見送り人は、柳の代わりに牡丹を切る所で登場すると思われたものであろうか。

越後と牡丹の関わりとしては、『越後名寄』巻十三に「牡丹」の項があり、「牡丹」○山野二不生上方辺ヨリ根コシ来ル○苑二植テ賞愛ス中花ニ花王ト称ス富貴ナル者ト云リ」と、上方から越後に来た花であるという記述がある。また、和泉流狂言『越後罽』は越後の罽が能登の舅を訪ねる際に酒樽・肴に牡丹一枝をみやげに訪問し、越後の獅子舞を舞い納めるという内容である。その他、『越後獅子』には「何たら愚痴だへ 牡丹は持たねど 越後の獅子は」という一節がある。越後国の地名が連続したことから、「獅子」を介して「牡丹」に連想がおよんだか。

(熊澤)

この一輪の牡丹剪しに

二折表五(二十七) 日たけても蚊帳(かむぎやう)はづれぬ西の館

卓池

【式目】蚊帳(夏)

【作者】卓池

【語釈】●日たけても 日盛りになっても。「日たく」は、日が高くなること。「今日毎に秋の光はよはるなり日たけて開け朝顔の花」(今川氏真詠草・780)。「長ねかや日たけてをくる雪の竹」(犬子集・1433・正直)。●蚊帳 蚊帳(かや)のこと。「見ても涼し寝ても涼しの蚊帳かな」(続山井・蚊帳・3589・友静)。

【一句立】日が高くなっても、蚊帳がはずれない西側にある建物。

【現代語訳】(この見事な一輪の牡丹を切つて飾っているので、)牡丹を少しでも長く咲かせておくために、日が高くなっても蚊帳をはずすことができない西の建物だ。

【考察】

植物は強い西日を嫌うものが多く、牡丹は中でも弱く、花の持ちが悪い。『江戸名所花暦(二)』の富岡八幡宮の永代寺庭園は、「園中牡丹盛りの頃は、日覆、障子をかけ渡し、奇麗なり」と述べられている。こうしたことから、花の持ち

の悪い「牡丹」のある「西の館」では、本来寝る時のものである蚊帳をいつまでたつてもはずせないと考えた。

(熊澤)

日たけても蚊帳(かまき)はづれぬ西の館

二折表六(二十八) 摩利支天へはいかなねぎこと

秋挙

【式目】 雑

【作者】 秋挙

【語釈】 ●摩利支天 インドの民間信仰の神。日本では、中世から武士に守り本尊として信仰された。「祈祷に黒くかはる白髪／真盛に負けめや守る摩利支天」(紅梅千句・859・友仙)。

【一句立】 摩利支天には一体どのような願いごとをするのか。

●ねぎこと 神仏に願う願い事。

【現代語訳】 (日が高くなつても蚊帳がはずれないような西の建物、昨晩は夜ふかしをしていたのだろう。) いったい摩利支天にどのような願い事をしたのだろうか。

(熊澤)

摩利支天へはいかなねぎこと

二折表七(二十九) 高麗へすぐに渡れと鶴を放ちけり

卓池

【式目】 雑 「高麗へすぐに渡れ」をとれば、春の句とも見えるが、「鶴」のモチーフの句は他に季節を表す語句を詠み込んで、季節を示す場合が多く、ここは雑としておく。

【作者】 卓池

【語釈】 ●高麗 朝鮮半島にあった国名。918年から1392年まで半島を支配した。また、朝鮮半島の別名。「高麗をばこま

といふ也。源氏きりつぼの巻に、高麗人にあひて相せられし事、花のえんにこまう人に扇をとられてなどかける、石川の歌の事をかやうにとりなしてかけり。」(連珠合璧集)。●鶴 鶴は渡り鳥であり、秋に北方より飛来し、越冬の後、春にまた北方へ飛び去る。「◇鶴 昔辺 沢辺…高麗 松前」(俳諧類船集)。●鶴を放ち 北宋の詩人林和靖の故事による表現。林和靖は、梅と鶴を非常に愛し、庭に梅を植え、鶴を飼って隠棲した。彼が留守の際に友人が尋ねてきた時は、鶴を放って知らせたという。「秋の風きのふや鶴を放ちたる」(蕪村集発句編・1001)。「キリギリスいなごも遊ぶ山水に／盃付けて鶴はなちやる」(蕉門俳諧集「いつを昔」歌仙・212／213・嵐雪／基角)。

【一句立】高麗の方へすぐに渡っていけと、鶴を放してやったことだ。

【現代語訳】摩利支天へはどのような願い事をしたのだろうか。その願い事をこめて、高麗へすぐ渡っていけと鶴を放したことだ。

(伊藤)

高麗へすぐに渡れと鶴を放ちけり

二折表八(三十) だぶりだぶりと波のしがらむ

秋挙

【式目】 雑

【作者】 秋挙

【語釈】 ●だぶりだぶりと 水や湯などの液体が豊富にあり穏やかに波打っている様。「夕風呂のだぶりだぶりとかすみ哉」(一茶集(発句編)・137)。●波のしがらむ 「しがらむ」は、水の流れをせきとめること。和歌では、普通「波のしがらみ」と名詞で詠まれる。「しがらみ」は、水の流れや流れてくるものをせき止めるために、川中に杭を打ち並べ、柴や竹などをからませたもの。「見渡せば波のしがらみかけてけり卯の花咲ける玉川の里」(後拾遺集・夏・一七五・相模)。「火渡や水のうたかた消えかかり／波のしがらみ赤がねの網」(大阪檀林桜千句・67／68・柴舟／均朋)。

【一句立】 だぶりだぶりと穏やかに波がたゆたい集まっている。

【現代語訳】 高麗にすぐ渡れと鶴を放つてやった。鶴の飛び去る先は、だぶりだぶりとは波がたゆたっている。

(伊藤)

だぶりだぶりとは波のしがらむ

二折表九(三十一) 芽にたつて冬のマサキ 柁のむらみどり

卓池

【式目】 冬

【作者】 卓池

【語釈】 ●芽にたつて 「芽」に「目」を掛け、芽ぶいてという意と、めだつての意とあわせている。「つれづれと物おもひをれば春の日のめにたつものは霞なりけり」(玉葉集・雑一・1846・和泉式部)。「遠山もけさはめにたつ霞かな」(大発句帳・春・574・宗祇)。「目に立たぬやうで目に立すみれ哉」(俳諧其傘・四季之発句春之部・76・貞富) ●柁 ニシキギ科のツル性の常緑の低木。庭木や生け垣にする。晩秋には赤く熟した種子が露出して、散る。本来は秋の言葉であるが、ここは冬。「暮秋…柁」(毛吹草)。「日暮るればあふ人もなし正木散る峯の嵐の音ばかりして」(新古今集・冬・深山落葉といへる心を・五五七・源俊賴)。「四五年のうちに三人婿取りて／村一番の柁木垣なり」(「汁の実の」歌仙・11／12・梅塵／一茶)。「冬の柁」という言い方は、続猿蓑の第三歌仙「いさみ立」からとっている。「いさみ立鷹引すゆる嵐かな／冬のまさきの霜ながら飛ぶ」(続猿蓑上・73／74・里圃／沾圃) ●むらみどり まだらに緑色をしていること。貞享三年の「日の春を」百韻にこの語を用いた句がある。「炭竈こねて冬のこしらへ／里々の麦ほのかなるむら緑」(「日の春を」百韻・6／7・杉風／仙化)。芭蕉は「冬畑の有様能言述侍る」と第七句を評する(初懐紙評注)。五十韻の冒頭に「鶴の歩みの調にならふ」とあることから、あきらかに卓池はこの百韻から語を取ったことがわかる。

【一句立】 芽が出た冬の柁は、そこが目立ってまだらに緑色になっている。

【現代語訳】だぶりだぶりと穏やかに波がたゆたい集まっている。冬の柵は、芽吹き始めた所がまだらに緑色を見せている。

【考察】芭蕉の指導した連句から意識して語をとりあつめた句である。

(伊藤)

芽にたつて冬の柵マサキのむらみどり

二折表十(三十二) 飾り鞆うつほをへだつ 歯ぎしり

秋拳

【式目】 雑

【作者】 秋拳

【語釈】 ●鞆 矢を入れて腰につけて持ち歩く筒型の容器。江戸時代には、紙の張抜の黒漆塗りに金紋を据えて、飾り調度とした。また、花瓶のようにして飾ってもいたことは、次の句からもわかる。「腮に額を当てくり言／貧家なれば闇さに光る花鞆」(江戸筏 天第十・340／341)。 ●歯ぎしり 睡眠中に歯をくいしばった際に出る摩擦音。「歯ぎしりにさへあかつきのかね／恨たる泪まぶたにとどまりて」(あら野(員外)・957／958・越人／越人)。「歯ぎしりの拍子とる也きりぎりす」(一茶発句編・397)。

【一句立】 飾り調度の鞆を隔てて歯ぎしりの音がする。

【現代語訳】 芽が出た冬の柵は、そこが目立ってまだらに緑色になっているが、そんなふうが目だって置かれた飾り鞆を隔てて、寝ている相手の歯ぎしりが聞こえることだ。

(伊藤)

飾り鞆をへだつ歯ぎしり

二折表十一(二十三) 野がけより愛もおとろふ主馬之助

卓池

【式目】恋(愛もおとろふ)

【作者】卓池

【語釈】●野がけ 野がけには、次のような意味があるが、ここは①か。①獲物を追って野山へ出ること。野狩。②花見や紅葉狩りなどで野山を遊び歩くこと。野遊び。③野外で行う茶の湯。野点。④野原・道端に設けた簡単な茶屋。「びんざさら音斗して失にけり／野がけのあそび不慮のいさかひ」(信徳十百韻・延宝二仲夏上旬・227／228・信徳)。●愛 執着としての愛着や、男女間の愛情。「かこひぬる芝居の茶屋は月迄も／愛におぼる紅葉の林」(時勢粧・4954／4955・如自／維舟)。「もはや月の秋は限りと読当座／声の内にやしかしかの愛」(時勢粧・髪何第三・6537／6538・維舟)。「同じ枝を秋は菓の百味とも／月には愛をいやましの声」(時勢粧・麦何第六・6873／6874・維舟)。●おとろふ ①物事の勢力が弱くなること。「さかんなる物はおとろふ世の習／十五夜おもふいざよひの月」(統山井・秋誹諧連歌・信徳興行に、293／294・湖春)。●主馬之助 主馬署(令制で春宮坊に属し、春宮の馬や馬具をつかさどる役所)の次官。

【一句立】野がけのときから、主人の寵愛が薄れてしまった主馬之助。

【現代語訳】(前句 飾り鞆を遠ざけて聞こえる歯ぎしりは、)野がけのときから主人の寵愛が薄れてしまった主馬之助が悔しがっているのだ。

【考察】

「主馬」を名に持つ人物として、例えば次のような人物が挙げられる。以下、それぞれの人物に対して、用例と注の説明を示す。

- ①狩野主馬尚信 「筆勢は主馬に極る花の雲」(其便・321・晋子)。「主馬」は、探幽の弟で絵師の狩野主馬尚信のこと。
- ②奥川主馬 「いづれか大名の御慈愛と見えて横目らしき坊主二人、めしつれられし若等あまた、馬も跡に引きつれば、

大かたならぬ御身ぞと、萬のことを忘れて行くに、(中略)辻番の者に尋ねければ、奥川主馬と申て、御小姓の由語りける。」(男色大鑑・第三卷・色に見籠は山吹の盛)。(3)浅香主馬「浅香主馬など都の殿とつぶれしの小哥に吞掛」(男色大鑑・第八卷・聲に色ある化物の一ふし)「延宝初年ごろの若衆時代は、京・坂の芝居を勤め、その後江戸に下つて元服し、市村四郎次と改名して立役を勤めた(野郎立役舞台大鑑)。主馬は評判記では賤妻とも表記し、「しづま」と呼ぶ。」(対訳西鶴全集六男色大鑑・注釈)。(4)小野山主馬「其時は、名に橘の小嶋妻之丞、彦十郎といひ、小野山主馬は宇治右衛門とて、こはい貞して今京の見物事になりぬ。」(男色大鑑・第八卷・別れにつらき沙室の鶏)。「主馬は賤女(しづま)とも書く。延宝期の上方の若衆方。天和元年立役に転じ、小野山宇治右衛門と改名。貞享・元禄期には敵役として名を揚げた。俳号を恋舟といい、『道頓堀花みち』に入集し、『西鶴大矢数』の第三十二の表に出席する。」(対訳西鶴全集六男色大鑑・注釈)。

「主馬之助」は、主馬寮の官職に就いている人物を指す場合も考えられるが、本句では『男色大鑑』における主馬たちのような若衆を指している可能性が高い。

(加藤 彩)

野がけより愛もおとろふ主馬之助

二折表十二(三十四) 踊りくづしにありく七夕

【式目】秋(七夕) 恋 夜分(七夕)

【作者】秋拳

【語釈】●踊りくづし 踊りの輪がくずれて人々が散らばるさま。類語として「おどりくづれ」は、盆踊りが終わって、人々が散っていくことをいう。七夕には「七夕踊り」があった。「七夕踊り」とは、『日本国語大辞典』によれば、「江戸初〜中期に、京都などで、七夕の日、着飾った娘たちが太鼓を打ちながら町を踊りあるいたもので、小町踊りともい

秋拳

う」とされる踊り。「七月：踊 題目おどり／小町おどり等」（毛吹草卷第二・誹諧四季之詞）。「わめきさけぶ：踊のくづれたるは又さはがし」（俳諧類船集）。「踊：馬」（俳諧類船集・112）。●ありく 歩いてあちこち動き回る。「浮草のうかれありくや女七夕」（其袋・秋之部・七夕・457・才麿）。●七夕 七夕祭り。五節句の一つで、陰曆七月七日の夜、牽牛星と織女星とが天の川を渡って逢うという中国の伝説から、二星を祭り、子女の技芸の上達を祈る祭り。「◇初秋：七夕 星合 星祭／同手向する」（毛吹草・連歌四季之詞）。「◇七夕 夜分也。秋也」（俳諧無言抄・213）。「日本の農村では広く七夕を盆の一部と考えており、精霊様を迎える草の馬を飾り、水辺に出て水浴を行い、墓掃除、衣類の虫干し、井戸さらえなどをする」（日本国語大辞典）。「七夕や先寄あひておどり初」（藤の実・秋・8・素牛）。

【一句立】踊りが終わり、踊っていた男女が散ってあちこちを歩きまわっている七夕。
 【現代語訳】（前句 主馬之助への盛んな寵愛は薄れてしまったけれど、盛んだった踊りが終わった男女は、逢い引きをして歩いて行く七夕であることだ。

（加藤 彩）

踊りくづしにありく七夕

二折表十三（三十五）女貞木ネツモチに月のかくるる町はづれ

卓池

【式目】秋（月）

【作者】卓池

【語釈】●女貞木ネツモチ 鼠麴。モクセイ科の常緑低木。庭木や生垣にもなる。葉は榊に似ており、薬用になる。初夏に白い小さな漏斗状の花を円錐状に付ける。その名は、黒く熟した果実が鼠の糞に似ていることと、葉がモチノキに似ていることに由来する。漢名に当てる「女貞」は、正しくはトウネズミモチの名。花は夏の季語。実は冬の季語。「女貞めいけい 一名冬青と云。女貞、櫨、な、みの木、此三品皆冬青樹と云。三品同名異物にて、各別の物なり。」（大和本草・

卷之十一・園木)。「女貞いぬのぼき／ねずみのふん／ねずみもち 貞木 冬青／蠟樹／和名太豆乃木／又云比女豆波木／俗云鼠乃久曾／又云狗都波木／又云鼠籬」(和漢三才図会・卷第八十四・灌木類)。**●**月のかくる 月が傾き(木の陰に)隠れる。陰曆七月七日の月は比較的早いうちに西に沈む(新日本古典文学大系『犬子集』956脚注)。「七夕のなかうどなれや宵の月」(犬子集・七夕・956・貞徳)。「あかずして月のかくるる山本はあなたおもてぞこひしかりける」(古今和歌集・卷第十七・雑歌上・883・業平朝臣)。「朝霧に日備揃よろづろへる貝吹て／月の隠るる四扉よとびらの門」(炭俵・469／470・孤屋／基角)。**●**町はづれ 町の中心から外れた、人家のなくなつてくるあたり。「みじか夜や暁しるき町はづれ」(蕪村集発句編(典)安永五年発句集・落日庵・608)。

【一句立】 月が女貞木に隠れるほど傾き、夜が更けた町外れ。

【現代語訳】 (前句 踊り終わった七夕の踊りを終えて、男女がちりぢりに散って行く。)その頃には、月が女貞木に隠れるほど傾き、町外れへと辿り着いた。

【考察】 「七夕」を詠む前句と関連して、ちりぢりに散って行った男女の、町外れにおける逢い引きを暗示していると考えられる。

(加藤 彩)

女貞木メツモチに月のかくるる町はづれ

二折表十四(三十六) たしなき米をはかる朝貌

秋挙

【式目】 秋(朝貞)

【作者】 秋挙

【語釈】 ●たしなき 「足し無し」の意で、物に乏しい意から転じて困窮・辛苦のさまをいうようになったとされる。「見る人もたしなき月の夕かな」(阿羅野・卷之一・月三十句二日・74・荷兮)。「三日月の入もたしなき師走哉」(蕉門名家

名句集二・223・浪化)。●米をはかる 「門よりうちにはかるわせ米」(塵塚俳諧集・1015)。「米山をはかるや鷹のますかき羽」

(ゆめみ草・巻第四冬・鷹・2654・天満義陳)。「◇鼠::米」(俳諧類船集)。「◇米::鼠」(毛吹草巻第三・付合)。●朝貌

朝顔。「初秋::朝かほ」(毛吹草・連歌四季之詞)。「槿 朝の字、顔の字に二句去也。又朝のかほに仕立たるならば、常

のことく嫌也。」(俳諧無言抄・546)。朝顔の花に形状がよく似た茶碗の形やそういつた茶碗そのものをもさす。「瑠璃び

いどろの朝顔で、味淋酒飲んでましますは、古郡殿の奥様ぞや(本領曾我) / 「朝顔」朝顔茶碗の略で、上方に開き下

方窄んだ茶碗。」(近松語彙)。「出茶屋の吉が許に腰を掛れば、箆笥の下より朝顔焼の天目出して、「是まいれ」のよし」

(男色大鑑・第七巻・素人絵に悪や金釘)。「朝顔の花の形に焼いた天目茶碗」(対訳西鶴全集六『男色大鑑』・注釈)。「朝

顔にわれはめし喰おとこ哉」(芭蕉俳諧集発句編(典) 真跡短冊・続余韻・天和二年壬戌・160)。

【一旬立】 乏しい米を朝顔型の茶碗で計っている。

【現代語訳】 (前句 女貞木に月が隠れている町外れで、) 乏しい米を朝顔型の茶碗で計っている。

【考察】 本句における「朝貌」は、植物ではなく朝顔型の茶碗を指す。前句に男女の逢い引きが暗示されているとすれば、本句では、逢い引きをして共に一夜を過ごした男女が、翌朝、二人で一人分の米を分け合う様子を暗示しているとも考えられる。

(加藤 彩)

たしなき米をはかる朝貌

二折裏一 (三三七) 厭離穢土欣求是越の山ごもり

秋拳

【式目】 雑

【作者】 秋拳

【語釈】 ●厭離穢土欣求

仏語。「厭離穢土欣求浄土」の形で用いられることが多い。煩惱に汚れた現世をきらい離れ

(浄土を) 心から願ひ求めること。「薰じ渡りし白無垢の夜着／穢土厭離打さそはるる鐘の声」(芭蕉集・朝顔や(歌仙)・22/23・史邦／芭蕉)。「とことにはおもふ事こそつきもせね欣求浄土と厭離穢土とを」(拾玉集・賦百字百首・おもふこと・1292)。**●越** 越の国。北陸地方の古称。後に、越前・越中・越後に分かれた。現在の福井・石川・富山・新潟の諸県にあたる。**●山ごもり** 山中に閉じこもり隠遁生活をしたり、山寺などにこもって仏道修行をしたりすること。「にがが敷もたうとかりけり／ところのみ掘くふ僧の山ごもり」(新增犬筑波集・あぶらかす・502・貞徳)。「運は天に任せて三年山ごもり」(大阪独吟集・989・重安)。

【一句立】煩惱に汚れた現世を離れて、越の国の山中で隠遁生活することを心から願ひ求める。

【現代語訳】(前句 乏しい米を朝顔茶碗で計っている。)こんな煩惱に汚れた現世を離れて、越の国の山中に籠って隠遁生活をしたいものだ。

(名倉)

厭離穢土欣求は越の山ごもり

二折裏二(三十八) 巻てたのしき敗軍の簀

卓池

【式目】 雑

【作者】 卓池

【語釈】**●巻く** 物のまわりからませる・巻きつける。また、しまう・収納する。「烏帽子を直す桜一むら／山を焼有明寒く御簾巻て」(続虚栗・春之部・156/157・野馬／其角)。「途中にたてる車の簾を巻て」(続虚栗・冬之部・芭蕉・573)。**●敗軍** 戦いに負けること。まけいくさ。また、その軍隊。「犬死と見て逃去し悔しきよ／敵は敗軍せり西の刻」(正章千句第九百韻・897/898)。**●蓑** 茅・菅などの茎や葉、または、藁や棕櫚などを編んで作った雨具。「蓑トアラバ・かくれ・山」(連珠合璧集・735)。「越前・蓑／蓑・乞食」(毛吹草・巻第四／巻第三)。「蓑……山賤・乞食」(俳諧類船集・

473)。スゲの葉で編んだ菅蓑は、越地方の名産品。●敗軍の蓑 前句の「越」「山ごもり」はいずれも「蓑」の連想を呼ぶ語句だが、ここでは斎藤道三の蓑をいうか。歌舞伎・浄瑠璃「本朝二十四孝」は浄瑠璃「信州川中島合戦」を元にして作られ、武田勝頼が蓑作という庭師になりすまし、また同じく庭師にやつした斎藤道三は、自分の蓑を山本勘助に与える際に「七重八重花は咲けども山吹のみの一つだになきぞ悲しき」と詠んだ歌によって正体が露見して、勝頼の前で自害する（歌舞伎では勝頼・上杉景勝等に捕えられる）という場面がある。道三は美濃国の住人でもあり、蓑と美濃は同音である。

【一句立】敗軍の蓑を巻くのも愉快な気分だ。

【現代語訳】（前句 煩惱に汚れた現世を離れて、越の国の山中に籠って隠遁生活をしたものだ。）山ごもりでは、寒さしのにぎに敗軍の蓑を巻くのも愉快な気分であることだ。

【考察】前句の越から越前名産の蓑、蓑がきっかけで武田勝頼に敗れた歌舞伎の中の斎藤道三へと連想を繋げていると見た。

（名倉）

巻てたのしき敗軍の蓑

二折裏三（三十九）こがらしにあぶらかかりし島細魚サヨリ

秋拳

【式目】初冬（こがらし・島細魚）

【作者】秋拳

【語釈】●こがらし 秋の末から冬の初めにかけて吹く、強く冷たい風。「冬の心…木枯」（連珠合璧集・898）。「初冬…こがらし」（毛吹草・巻第二）。「木枯 初冬也」（俳諧無言抄・477）。「本こがらしに二日の月の吹ふ散き散ちるか」（阿羅野・初冬・419・荷兮）。●あぶらかかりし 脂が加わっていく、脂がのっている意。「かかる」は強制する力、重み、色あいなどが加わる事。「塩

鮭のあぶらたるなり五月雨」（暁台句集・五月雨・45）。この「脂」は、冬になると一段と必要になる「油」を連想させ、次の句の「薪」を呼びこんでくる。「油…師走」（俳諧類船集・500）。●島細魚 島の細魚の意か。もしくは「島は、その側面の濃青色の縦線をいうか」（新日本古典文学大系『芭蕉七部集』「あはれなる落葉にたくや島さより」の句脚注）とも。細魚は、細長くサンマに似た沿海魚。膾にすることが多い。『鶉衣』に「鱧・さよりはをさなき心地ぞする。大男の鬚口そらしてくふべきにあらず」（百魚譜）とあり、尾張・三河でもよく食用とされていたであろう。「あはれなる落葉に焼や島さより」（阿羅野・613・荷兮）。「沖細魚の塩のきかぬ南氣」（俳諧別座鋪・40・李里）のように「沖細魚」と書いて「サンマ」と読む例はある。

【一句立】こがらしが吹く季節になって脂が乗ってきた島細魚。

【現代語訳】前句 寒さしのぎに敗軍の蓑を巻くのも愉快な気分であることだ。こがらしが吹く季節になって脂が乗ってきた島細魚だ。

【考察】美濃の領主となった斎藤道三は漏斗を使わずに一文銭の穴を通して油を売ったという逸話が残るように油売りの商人であった（『美濃国諸旧記』巻一「土岐氏零落斎藤道三の事」）。戦国武将のエピソードを使って冬の脂がのった魚へと転換しているか。

（名倉）

こがらしにあぶらかかりし島細魚

二折裏四（四十） 積はへてある薪の入れみだ

卓池

【式目】秋（薪）

【作者】卓池

【語釈】●積はへて 積み並べて。●薪 かまど、炉などに燃料としてたく細い枝や割木。「市…薪」（俳諧類船集・9）。「き

りぎりす薪の下より鳴出して」(炭俵・79・利牛)。「小束なる枝木斗のはした薪」(誹諧別座鋪・167・杉風)。「露霜は薪のあぶらに積込て／人は後の風をおどろく」(金竜山・541/542・古百/浪巴)。

●入札 (最も有利な条件を示す者と契約を結ぶため、多数の競争者に見積額を書いた紙を提出させ、その結果を見て相手を決めること。また、その見積額を書いた用紙。寒さで活発化している「薪」の市場のありさま。「傘ほどな雲が氷をふらせけり／斧のはいらぬ山に入札」(国の花・第十二かたはし・3223/3224・桂士/竹之)。「入札の立木をつもるさし物屋／飯台のめし喰ふははじめて」(和漢文操・求韻歌仙行・104/105・兎士/蓮二)。

【一句立】積み並べてある薪には入札札がついている。

【現代語訳】(前句　こがらしが吹く季節になって脂が乗ってきた島細魚。)それを焼く薪は積み並べてあり、入札札がついている。

(名倉)

【参考文献一覧】

- 和歌・連歌・俳諧の引用は、特に断らない限り、『新編国歌大観』CD-ROM、『新編私家集大成』CD-ROM、『古典俳文学大系』CD-ROMにより、
- 『万葉集』の引用が必要な際には新編日本古典文学全集本によった。
- 『播磨国風土記』…新編日本古典文学全集5『風土記』(1997・小学館)
- 『妹背山婦女庭訓』…新編日本古典文学全集77『浄瑠璃集』(2002・小学館)
- 『平家物語』…新編日本古典文学全集45『平家物語(一)』(1994・小学館)
- 『薩摩歌』…新編日本古典文学全集74『近松門左衛門集(一)』(1997・小学館)
- 『曾良旅日記』…『天理図書館善本叢書と書之部第十卷　芭蕉紀行文集』(1972・八木書店)
- 『越後名寄』…国文学研究資料館蔵三井文庫旧蔵本『越後名寄』(MX-341-8)による。
- 『越後獅子』…名作歌舞伎全集第二四巻『舞踏劇集二』(1972・東京創元社)

- 『江戸名所花暦(二)』：岡山鳥編『江戸名所花暦(二)』(1894・博文館、国立国会図書館近代デジタルライブラリーによる)
- 『毛吹草』：岩波文庫『毛吹草』(1943・岩波書店・竹内若編)
- 『俳諧無言抄』：宮坂敏夫・東明雅『俳諧無言抄 翻刻と解説』『紀要』(1983・3・信州大学)
- 『俳諧類船集』：『近世文藝叢刊1 俳諧類船集』(1969・野間光辰監修)『近世文藝叢刊別巻1 俳諧類船集索引付合語篇』(1973・野間光辰監修)、『近世文藝叢刊別巻2 俳諧類船集索引事項篇』(1975・野間光辰監修)
- 『近松語彙』：『近松語彙』(1930・富山房・上田万年、樋口慶千代著)
- 『男色大鑑』：『対訳西鶴全集六 男色大鑑』(1979・明治書院・麻生磯次、富士昭雄著)
- 『大和本草』：『益軒全集卷六上』(1910・益軒全集刊行部)
- 『和漢三才図会』：『和漢三才図会』(1970・和漢三才図会刊行委員会編)
- 『美濃国旧記』：『国史叢書』(1915・国史研究会)
- 『本朝二十四孝』：日本戯曲全集28『義太夫狂言時代物語集』(1928・春陽堂)

『和歌の歌枕・地名大辞典』(2008・おうふう)

高木侃『三くだり半と縁切寺』(一九九二年三月、講談社現代新書)

日本歴史地名大系第一五巻『新潟県の地名』(1986・平凡社)

『名古屋城の庭園』(1980・名古屋城振興協会)

飛田範夫『日本庭園の植栽史』(2002・京都大学学術出版会)

飛田範夫『江戸の庭園』(2009・京都大学学術出版会)第七章三「富岡八幡宮の園池」

※【語釈】については、『角川古語大辞典』、『日本国語大辞典』等を参考に作成している。

愛知県立大学稀書の会(教員・院卒業生、院生)

久富木原玲 大塚英二 伊藤伸江 中根千絵 三宅宏幸 名倉ミサ子 狩野一三 熊澤美弓 加藤彩 足立絵里奈

井上麻美
美濃羽絃子
加藤華
山本智穂